様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２７日現在

機関番号：14501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22720281
研究課題名（和文）　古代東地中海世界国際関係におけるエリート間の紐帯に関する研究

研究課題名（英文）　Research on International Relationships between Elites in the Eastern Mediterranean World

研究代表者
佐藤　昇　（SATO NOBORU）
神戸大学･大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：50548667

研究成果の概要（和文）：
本研究では､紀元前５世紀から前３世紀の東地中海世界における人的交流に関して､クセノス、プロクセノスと呼ばれる人々に注目し、通時的な変化と継続性を分析し、これが国家間の外交関係に及ぼした影響について検討を加えた。とりわけ、古典期アテーナイに関しては、文献史料と碑文史料の悉皆調査を通じ、国際的紐帯が国内政治に及ぼす影響が大きかったこと、国際的紐帯を有するエリートには閉鎖性が認められるものの、同時に社会的流動性もきわめて大きかったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This research aims to investigate the significance of international friendships, especially xenia and proxenia, in the eastern Mediterranean World from the 5th to 3rd century BC. I have pointed out, first of all, that personal international friendships were valuable and hereditary as a form of political capital within democratic Athens, as elsewhere in the Greek world and beyond. Secondly, while personal connections with foreign states and leaders were theoretically hereditary, they were in practice not exclusive to a limited number of established political families but open to newcomers. Athens under democracy had a high degree of social mobility also in this sphere.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：古代ギリシア、碑文、外交・アテーナイ、東地中海、エリート、ネットワーク、社会変動

１．研究開始当初の背景

古代ギリシア世界に無数に存在した都市国家（ポリス）では、各国のエリートが、国の枠を越え、他国（ペルシアなどギリシア以外の地域も含む）のエリートたちと、あるい

は他の国家と私的に人的紐帯を形成していた。国家間の外交においてもまた、そうした国際的な私的人脈を通じた公式･非公式の交渉が、しばしば行われていた。

このうち他国のエリート同士、個人同士が取り結ぶ関係はクセニアー関係と呼ばれ、そうした関係を結んだ人間をクセノスと呼ぶ。国家が特定の個々の外国人に認定する地位はプロクセニアーと呼ばれ、認定された人間はプロクセノスと呼ばれた。プロクセニアーは、国家によって認定される地位であるが、公式の役職ではなく、さらにプロクセノスは自国（所属ポリス）においては、制度上、私人でしかなかった。いわば、国家が他国のエリートと私的な友好関係を結ぶようなものであった。

こうした国家の枠組みを超えた私的紐帯に関して、とりわけクセニアー関係については、従来、貴族的な性格、あるいはエリート的な性格が強調される傾向にあった。またプロクセニアーに関しては、近年、プロクセニアーを「認定する」国家･地域に注目し、認定した政治的意図を、同時代の政治状況に照らして分析する傾向が強かった。

以上の研究方法には一つ、大きな問題点が指摘できる。それは、国家の枠組みを超えた私的紐帯の重要性を無批判に強調する点にある。実際、そうした関係が容易に内訌、国家背任に繋がりやすかったという見解も提示されている。それならば、他国との間にそうした私的関係を形成したエリートは、国内でどのような振る舞いをすることになったのだろうか。プロクセニアーやクセニアー関係を持つことにより、当該のエリートが国内政治において如何なる影響力を及ぼし得たのか。これまでの研究では、こうした点について、ほとんど検討がなされてこなかった。

２．研究の目的

上記の研究状況に照らし、本研究は、古代ギリシア世界を含む、古代東地中海世界における、国家の枠組みを超えた私的紐帯が有した政治的機能について、とりわけ国内政治に及ぼした影響を分析し、さらにその通時的変化について検討を加えるものである。

時代は紀元前５世紀から前３世紀、すなわちアテーナイ民主政が成立、発展した時代から、ヘレニズム時代初頭までの時代を対象とする。

地域に関しては、東地中海世界全体を視野に入れるが、まずは古典期のアテーナイに焦点を合わせる。地域の選択は史料上の問題も影響しているが、同時に、歴史学上、重要な問題を孕んでいるからでもある。すなわち、前５世紀から前４世紀末にかけて、アテーナイはデーモクラティアー（民主政）と呼ばれる政治体制を現出させた。市民間の平等を旨とする政治体制であり、そのイデオロギーが社会に広く浸透していたことは、研究史上繰り返し指摘されている。他方、国際的な私的紐帯は、エリート的な性格、あるいは「貴族的」な性格が強いとされている。それでは、この私的紐帯は、アテーナイ国内でいかなるものと認識されていたのか。敵視され、あるいは無視されていたのか、あるいは政治資本として重視されていたのか。まずはこの点について正確に史料を検討しなければならない。続いて、その社会的意味合いが、時代を追うにつれ如何に変化したのか、その通時的変化にも目を向けねばならない。

古典期アテーナイの状況を踏まえた上で、その性格を相対化し、比較検討を行うために、他の都市についても検討を加える。ただし、史料上の制約から、アテーナイ以外のクセニアー関係を十分に検討することは難しい。そのため、他地域に関しては、プロクセニアーについてより詳細に検討を加えることとする。研究期間内で東地中海世界全体の事例を精緻に検討する余裕はないため、いくつかの地域（とりわけ小アジアのイオーニアー地方および沿岸の島嶼部）を中心的に分析する。

３．研究の方法

（１）古典文献及び碑文史料から、国際的紐帯が確認できる事例を網羅的に確認する。時代と地域に関しては、まず古典期アテーナイに絞り、同市民が他国から受けたプロクセニアー、他国民と結んだクセニアーの事例を可能な限り全て収集した。碑文史料は通常、出土地域ごとに整理されているため、調査は容易ではないが、複数の碑文集に跨がる事例を丹念に検討し、これに加えて Suppulmentum Epigraphicum Graecorum 等を利用して、新規に報告される碑文なども極力検討対象に加えた。

（２）収集した事例について、そうした地位が、主に国内の政治活動においてどれほど意味があったのか、如何に評価されていたのか、主に同時代の文献史料を手がかりに検討を加える。国際的な私的紐帯をもつエリートが、実際にはどのような場面で活動をしていたのか、そのような私的紐帯そのものに対しては、同時代のギリシア人がどのような感情を抱いていたのか、といった点に着目し、検討を加えた。

（３）（１）で収集した事例の全てについてプロソポグラフィを調査し、国際的紐帯をもつ家柄の閉鎖性と社会的流動性について検討を加えた。プロソポグラフィの検討に関しては、Prosopographia Attica, Athenian

Propertied Families, Lexicon of Greek Personal Names 等を利用するとともに、個々の史料について自ら再検討を加えた。この際、国際的な私的紐帯をもつ人物が如何なる人物であるか、そしてとりわけその家柄がどのように政治に関わっていたか、あるいは関わっていなかったかについて検討を加えた。

（４）小アジアのイオーニアー地方、エーゲ海岸島嶼部に関しても同様の検討を行った。ただし史料の制約上、分析対象は主にヘレニズム時代の碑文及び断片史料となった。

４．研究成果

（１）古典期アテーナイにおいて、他国のエリートとクセニアー関係を結んだ事例、他国からプロクセニアーを認定された事例を網羅的に収集し、プロソポグラフィについて検討を加えた上で、一覧表にまとめた。これは国際学会の場でも発表し、さらに近刊の英語論文にも appendix として発表される予定である。これに類するものは、これまで発表されたことがない。研究の基礎となるデータを提供しているため、今回の研究ばかりではなく、今後のクセニアー、プロクセニアー研究にも大きく資するであろう。

（２）収集したデータを基に古典期アテーナイの政治／社会状況を分析した。
その結果、
①平等を旨とする民主政下のアテーナイにあっても、他国のエリート（君主や貴族）、あるいは諸国家との私的な人的紐帯は、格別な政治資本と見なされていたことが明らかとなった。とりわけ、関係改善、関係構築を目指す相手国との間に私的な紐帯を有するエリートアテーナイ市民は、使節などの役割を意図的に任される傾向にあった。

②クセニアー、プロクセニアーと言った地位は、本来、父から息子に受け継がれるものであることを確認し、この種の政治資本は、民主政下のアテーナイにおいても、一定の（エリート）家系内で継承される傾向にあった点を指摘した。

③他方で、事例全体を見てみると、必ずしも数世代に亘って継続的に政治活動に従事していたことが確認できないケースが多い。逆に、伝統的な家柄の出身者以外でも、新たに他国との人的紐帯を獲得するものも数多く見られた。プロクセニアーを複数の市民に認定する事例も確認される。したがって、具体的事例の検討からは、むしろ社会的流動性が高かったことが確認できた。この点に関してはまず国際学会で発表し、これを基に国内での発表も行い、高い評価を受けた。近く英文での論文が公表される予定である。古典期アテーナイに関して、外交と内政のせめぎ合う様を論じたものはこれまでにあまりなく、その独自の視点は、今後の研究に一定の意味を持つであろう。

（３）ヘレニズム時代の小アジアのプロクセニアー事例に関しては、相当数の事例を収集した。その一部は、古典期アテーナイの事例を分析する際に、比較対象として活用できた。しかし個々の地域について、単独で十分な見通しが得られるほど、細部を詰めるには至らなかった。ただし、派生的ながら、この時代特有の私的紐帯の形成方法も含めた、当該地域の外交文化について理解を深めた。このうち、ヘレニズム初期のミーレートスについて、セレウコス朝の王や隣国との外交関係とアイデンティティの形成について、学会発表を行い、論文を発表した。

（４）上記の分析をするにあたって確認できた、個々の史料解釈上の問題、プロソポグラフィに関する問題を検討し、その結果を国内外で評価の高い査読付き雑誌に投稿し、掲載された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Noboru, SATO,
’Aristocracy’ and Athenian Diplomacy, in N. Fisher and H. van Wees (eds.) Aristocracy, Elites and Social Mobility in Ancient Societies
Swansea、査読有り、近刊予定。

② 佐藤昇
「ミレトス神話とディデュマ」『西洋古典学研究』
査読有り、61 号、2013、12-23。

③Noboru, SATO,
Maiandrios and(?) Leandr(i)os of Miletos: nos. 491-492, in I. Worthington et al. (eds) Brill’s New Jacoby, Brill Online (Leiden)
査読有り、2012、Online。
http://referenceworks.brillonline.com/entries/brill-s-new-jacoby/maiandrios-of-miletos-and-leandr-i-os-of-miletos-491-492-a491_492>

④ Noboru, SATO,
“Antigonos: no. 775”, in I. Worthington et al. (eds) Brill's New Jacoby, Brill Online (Leiden)
査読有り、2011、Online。
http://referenceworks.brillonline.com/entries/brill-s-new-jacoby/antigonos-macedo-775-a775

⑤ Noboru, SATO,
″Religious and Political Trial: Another Aspect of Anytus' Prosecution against Socrates″ KODAI: Journal of Ancient History
査読有り、15/16 号、2010、25-40。

〔学会発表〕(計４件)

①佐藤昇
「ミレトス神話とディデュマ」日本西洋古典学会第 63 回大会
2012 年 6 月 2 日、龍谷大学

② 佐藤昇
「マケドニアのアンティゴノスとアマンティア」古代史の会
2011 年 11 月 25 日、東京大学

③ 佐藤昇
「古典期アテーナイの政治家-外交と社会変動」第 9 回古代史研究会大会
2010 年 12 月 19 日、京都大学

④ Noboru, SATO
“A Comment on Che Ja-Young's” Japan-Korea-China Symposium for Ancient European History 2010
2010.10.22-23、Seoul National University (Korea)

〔図書〕(計２件)

①ロビン・オズボン（佐藤昇訳）
『ギリシアの古代：歴史はどのように創られるか （刀水歴史全書)』刀水書房
2011、261

②桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』山川出版社
2010、252-273

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　昇（SATO NOBORU）
神戸大学･大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：50548667